令和6年10月30日発行

学校だより

第7号

江戸川区立瑞江第三中学校

〈　教　育　目　標　〉

1　自ら学んで、自己を高める生徒　【知性】

2　人を大切にして、共に生きる生徒　【敬愛】

3　心身が健やかで、活力のある生徒【健康】

後期スタート ～生徒会役員、専門委員、係の改選～

9月24日(火)、生徒会役員選挙が行われ、新しい生徒会役員が決まりました。また各学級においては、後期委員や学級の係の改選が行われ、委員長は3年生から2年生に引き継がれました。意欲満々の生徒達に期待しています。

みなかみ町 移動教室（2学年）～自然体験から学ぶ～ 9/10(火)～12(木)

今回の移動教室では、ハイキング、レク大会、家業体験、キャンプファイヤー、飯盒炊飯などの体験をしました。そして事後学習では、事前学習と実際の体験を活かして、人間と自然とのかかわりについて班ごとにテーマを決めて学びを深めました。子ども達は、様々なことを学んだようです。

【生徒作文の抜粋・要約】

◆ 私は今回の移動教室で、いろいろなものに触れることができました。例えば、自然の心地よさや、そこで暮らす人々の優しさなどです。自然の心地よさで私の心に残ったことが、「自分自身で動き、体験することの楽しさ」です。今回の体験の中に家業体験がありました。その中で耕作放棄地での田んぼサップ体験というものがありました。慣れてきてしっかりと漕げるようになったあたりで、暑さや痛み、風や水の感覚をしっかりと感じたのです。家でゲームをやっているときなどに、足りないと感じていたものはこれだったのかと気づきました。

◆ 家業体験で、農家さんの仕事の楽しさと大変さが分かりました。とても良い体験でした。

◆ 2日目の夜は、初めてキャンプファイヤーをして、火の美しさに驚きました。火を見るだけなのか、なんて思っていたけれど、何も考えないで見ていられて気分がよかったです。火を見て、最後の夜ということを実感し、最後の日に向けて気持ちが高まりました。

◆ 2年生のみんなが、時間に気を付け、中学生としての自覚をもった行動ができている人が多かったので、規則正しい生活ができたのだと思います。僕は、中学生としての自覚が、1年生の時よりも成長していると感じました。

◆ バスに乗っているとき、群馬は私の母国の故郷の村のように見えました。忘れていた思い出がよみがえりました。自分の殻を抜けだし、みんなとの話を楽しもうと最善を尽くしました。一緒にゲームをしました。日本語もいくつか教えてくれました。母国で友達と過ごしたような楽しい時間を過ごせました。誇らしい一番の思い出は、みんなの前で日本語を話したとき、みんなが驚いて、私が日本語を上手になったことを褒めてくれました。少し恥ずかしかったけど、どれほど嬉しかったかは言葉にできません。いつも助けてくれる先生や友達全員に感謝します。私がみなかみ町の話を両親に話すと、両親はとても喜んでくれました。素晴らしい経験でした。また行きたいです。

15歳 私の集大成の旅 修学旅行(3学年) 9/30(月)～2(水)

暑さがほんの少し和らぎ、好天に恵まれた修学旅行。1日目は奈良公園散策。東大寺で金剛力士像、大仏と出会い、神の使いの鹿と戯れました。続いて遠くギリシャやシルクロードの影響を受けている世界最古の木造建築 法隆寺を訪ねました。

2日目は京都市内班行動です。自分達で立てた計画をもとに班行動をしました。初めての地でバスや電車を乗り継いで行動することは大変でしたが、班員で協力して無事に終えることができました。夕食は、豪華なすき焼き。“いただきます”とともに、またたく間にお肉はお腹の中に。夜は思い思いの工芸品づくりを楽しみました。最終日は、タクシーで京都巡り。運転手さんの楽しい話を聞きながら、京都観光を満喫しました。

事後学習では、国語の授業で学んだ松尾芭蕉の「おくのほそ道」を手本に、修学旅行の思い出を紀行文にまとめました。味わいのある作品になりました。

清水寺（きよみずでら）　H・M

清水寺は京都の坂をのぼった先にあり、清水の舞台は非常に見晴らしが良い。坂上田村麻呂によって建てられたこの地には、無病息災や良縁のご利益があるとされている。

清水の舞台からの景色は京都を一望でき、その美しさに胸を打たれた。昔ながらの神社や寺と現代の京都の象徴である京都タワーが共存している姿は、京都の歴史と発展を同時に味わうことができ、感慨深く感じた。

秋が深まり、紅葉に囲まれれば、さらに素晴らしい景色になるだろう。

過去と今　共に生きる夜ぞ　赤もみじ

渡月橋（とげつきょう）　H・R

嵯峨（さが）・嵐山（あらしやま）地区の間（あいだ）を流れる桂川にかかる渡月橋。

承和年間に僧道昌によって架橋（かきょう）したのが最初とされており、現在の位置には後年（こうねん）に角倉了似がかけたとされている。全長約百五十五メートル、幅約十二、二メートルの橋で、もともとは木造だったが、現在は鉄筋コンクリートと木が使用されている。

まず嵐山に着き、渡り始めると周りの景色に目を奪われた。左側には澄み切った桂川、右側には草木が生い茂り青々とした嵐山がそびえたっている。その桂川の透明度、嵐山の木々のもたらす爽（さわ）やかな空気が僕を清々（すがすが）しい気分にしてくれた。慌ただしい現代から切り離され、自然を感じいつまでもその場にいたいと感じた。

山粧（やまよそお）う　自然と町を　つなぐ橋